

自然と生きる・自然を活かす ～みんなで作る地域の力～

2012年12月2日(日) 青森県青森市 リンクステーションホール青森

主催: 全日本社会貢献団体機構/東奥日報社/全国地方新聞社連合会

後援: 青森県/青森県教育委員会/NHK青森放送局/共同通信社/全日本遊技事業協同組合連合会/青森県遊技業協同組合



2012年度の社会貢献フォーラムは、「自然と生きる・自然を活かす」をテーマに、
みちのくの地・青森県青森市で開催された。豊かな恵みや心の安らぎを与えてくれる一方、
ときとして凶暴な力で私たちを脅かす自然。自然を守り、自然を活かすことで、
魅力ある地域づくりができないだろうか。

今回のフォーラムは、その可能性を探るものとなった。第一部では青森県出身の舞の海秀平さんによる講演、
第二部では5名のパネリストによるディスカッションが行われた。

自然のなかで生まれた「じょっぱり」精神

約300名の参加者が詰めかけた青森市での社会貢献フォーラムは、主催者を代表して、東奥日報社の取締役・読者事業局長・平川正敏さんの開催のあいさつで始まった。

第一部の講演で壇上に登ったのは、青森県出身で、NHK大相撲解説者やスポーツキャスターとして知られる舞の海秀平さん。「私を育てた青森の自然」をテーマとする話は、笑いあり、アクションありで、大いに盛り上がった。「青森の風土、人、自然、食生活など、さまざまなものに支えられ、生まれたことで、今日の自分がある」という話で始まった講演は、まず子どもの頃の食生活について言及。母親が作る手料理は毎日、刺身、焼き魚、煮魚などの魚料理で、味噌汁にまで魚が入っていたため、ハンバーガーやスパゲティが食べたい舞の海さんとしては、うんざりだったという。しかし、「そのおかげで、大きな人と相撲をとってきたが、一度も骨折はしなかった」と、感謝の言

葉が述べられた。

続いて、中学時代の恩師の先生についての話があった。相撲部の顧問で、「体が小さいことを理由に相撲をやめようと思ったが、決してやめさせてくれなかった」、「稽古に行くのに弁当を忘れていったら、ラーメンやかつ井の出前を取ってくれた」、「定年後の楽しみは大相撲中継で舞の海を応援することだったと、亡くなってから奥さまから聞かされた」といった話が続いた。「あのとき、相撲をやめることを先生が許してくれていたなら、いまの自分はなかった」という舞の海さん。墓参りに行ったら、墓石にはただひと言、「自然にかえる」と彫られていたという印象深い思い出を語った。

また、現役時代の思い出に残る一番として、小錦や曙といったハワイ勢との対戦をあげた。300kg近くの小錦関との対戦でヒザの靭帯を断裂したことや身長2m以上ある曙関との対戦で、立ち合いにいきなりしゃがむ姿勢から三所攻めという技で勝ったという話が出た。最後に、

「体の小さな自分が大きなハワイ勢に向かっていけたのも、青森の自然のなかで生まれ育った18年間で、『じょっぱり』という津軽人に特有の気質が育まれたからだと思う」という、ふるさとの自然に対する感謝の言葉で舞の海さんは講演を締めくくった。

成熟期の社会に求められる価値観や発想

休憩をはさんでスタートした第二部では、「自然と生きる・自然を活かす～みんなで作る地域の力～」をテーマにしたパネルディスカッションが行われた。コーディネーターの村松真貴子さんのあいさつに続いて、パネリストとして青森県遊技業協同組合理事長・大西康弘さん、東奥日報社編集局報道部次長・近藤弘樹さん、舞の海秀平さん、早稲田大学教授・鳥越皓之さんの自己紹介があり、まず鳥越教授が、テーマの基調報告を行った。

歴史人口学が明らかにしたことだが、これまで人類は「成長」と「成熟」を繰り返してきたという。成長期には人口が増加し、成熟期には人口が減少する傾向が見られるが、人口減少時代に突入した日本は、これから成熟の時代を迎えることになる。そこで、どのような社会を創っていくかが大きな課題となるが、その背中を押したのが東日本大震災であり、成熟期への移行がはっ

きりしてきた。街づくりなどが盛んに言われているのも成熟期の特徴だし、高度な科学技術やシステムへの不信を背景にして、face to faceの言葉に象徴されるような関係性が成熟期の社会では重視されるようになる。

また、成長期には努力・真面目・大きい・強い・合理的などの価値観が求められるが、成熟期には休息・遊び・小さい・弱いなどの価値観が大切なものとなってくる。そのなかで生きる目的も変わってくるし、その一環として地域の幸せを考えるような時代になってくる。成長期の発想では、青森は遅れていると感じている人もいるかもしれないが、成熟期の発想では、豊かな自然をバックボーンに持つ青森はトップランナーになるかもしれない。そうした観点も、社会貢献活動を考えるうえでのヒントになるのではないかと、鳥越教授は話を結んだ。



出席者プロフィール



舞の海秀平さん
NHK大相撲解説者、
スポーツキャスター

1968年、青森県生まれ。日本大学相撲部で活躍後、大相撲・出羽海部屋入門。90年、初土俵。91年、幕内入り。角界最小の体ながら、数々の技を繰り出し、「技のデパート」の異名をとる。99年、引退。2011年からは近畿大学経営学部客員教授も務める。



鳥越皓之さん
早稲田大学人間科学
学院院教授

1944年、沖縄県生まれ。関西学院大学教授、筑波大学大学院教授を経て、現職。行政や住民のリーダーたちと地域社会の諸問題を地域づくり、NPO・コミュニティのあり方などを研究。『サザエさんのコミュニティの法則』『水と日本人』など、著書多数。



大西康弘さん
青森県遊技業
協同組合理事長

1959年、青森県生まれ。小・中・高・大学と地元で学び、81年、父の経営する(株)朝日会館入社。青森県防犯協会連合会風俗環境浄化専門委員会委員、青森県暴力追放県民センター理事などを歴任。遊技産業を通じ、各種の社会貢献活動に取り組んでいる。



近藤弘樹さん
東奥日報社編集局
報道部次長

1967年、青森県生まれ。東海大学文学部広報学科卒業。90年、東奥日報社入社。校閲部・政経部・社会部・東奥小中学生新聞「週刊Juni Juni」編集部などを経て、2012年より、現職。『東奥日報』連載中の「2030あおもりの未来」取材班デスク。



村松真貴子さん
アナウンサー、
エッセイスト

東京都生まれ。武蔵大学文学部卒業。NHKで「イブニングネットワーク」「こんにちは!」の料理」などを担当。現在、NHK学園、NHK文化センターなどで講師を務めるかわら、子どもたちへの読み聞かせボランティアもしている。

自然と生きる・自然を活かす

～みんなで作る地域の力～

青森県で展開されている社会貢献活動

続いて、大西康弘理事長から、青森県遊技業協同組合や傘下のホールが行った最近の社会貢献活動の事例が紹介された。まず青少年の健全育成に関する活動例として、「少年非行防止JUMPチーム」への支援が紹介された。JUMPチームとは、非行の要因の一つとなっている少年の規範意識の低下を防ぐために、さまざまな活動を通じて子どもたち自身が非行防止を呼びかけ、その輪が広がることを目的とするもので、現在、青森県内の小・中・高校の312校で結成されているという。

また、東日本大震災の復旧・復興支援として義援金の寄贈や津波などの大規模災害に備えるための活動として、災害時に一時避難場所としてホールの建物や駐車場を提供する協定が一部自治体との間で結ばれたという紹介もあった。このほか、スポーツを通じた青少年の健全育成支援、身体の不自由な方への車椅子の寄贈、県内自治体へのAED寄贈、自然を育てる活動として五所川原市の市民の森への植樹支援、また、シャッターが閉まっている店の前の歩道を確保するために雪かきを行い、住民や通行人から感謝されているという、雪国ならではの事例も紹介された。

東奥日報社の近藤弘樹さんからは、青森県内で行われているボランティア活動や地域貢献活動の事例が3

例、紹介された。まず、東日本大震災後、弘前市にある弘前大学の学生・職員、市民、行政が連携して「チーム・オール弘前」を結成し、岩手県野田村への支援活動を続けているが、現在は交流活動を通じた心の支援へ形が変わってきたこと、そうした活動を通じて学生たちの間に自分たちが暮らす地域への関心が芽生えるなどの副次的効果が生じているという話があった。

自然を活用したコミュニティビジネスの実例として取り上げられたのが、大鰐町の「おおわに自然村」。これは耕作放棄のリンゴ園を活用した自然体験ができるグリーンツーリズム施設で、養豚場および豚肉加工場を併設している。ここの養豚場では、スーパーやコンビニなどから出る食物残渣をリサイクルした飼料で豚を育て、それを生ハムなどに加工している。いわば循環型の畜産を行うことで、青森のすばらしい自然環境を守り、子どもたちのために伝えていくことを使命としている。

3例目として、八戸市のNPO法人「グリーンシティ」が中心となった自然エネルギー事業の紹介があった。ここは風力発電による電気を電力会社に売り、その利益を積み立てて地域振興につなげる試みを行っている。今後は、メガソーラー発電のためのエナジーパーク建造や障がいのある方々の居場所づくりにも取り組んでいく予定で、1本の風車から始まった活動が、次の夢へとつな



がりつつあることが紹介された。

こうした事例紹介に対して、舞の海さんは取材や番組企画で訪れた東北やブータンでの体験について話された。被災地では、国の制度や行政の仕組みが現実に追いついていないことを痛烈に感じたことやブータンでは相撲を教えた子どもたちが素直で元気だったこと、渡り鳥のために電気を引くことを断念した村があるといった話などを紹介したあと、「今後は傲慢な心、独善的な心を抑えながら自然と生きていくことが、自然を活かすことにつながるのではないか」といった感想が述べられた。

参加者の合唱で終わったフォーラム

まとめとして、今回のフォーラムに関する率直な思いや感想がパネリストやコーディネーターから発表された。

「これまでは経済成長率が指標だったが、今後は変わってくる。たとえば水のおいしさということであれば、青森はトップだし、東京はビリということになる。これからは自分で基準を決める時代。そうしたなかで自然を活かすことの意味を考えてほしい」(鳥越皓之さん)。

「今回の大震災や福島原発事故を通して、皮肉にも普通に自然のなかにいられることがどれほど幸福なことなのか、再認識させられた。青森県遊技業協同組合としても、住みよい郷土となるよう、微力ながら力になっていきたい」(大西康弘さん)。

「家族でボランティアなどについて話をするだけでも、子どもたちに思いは伝わっていく。そうしたことが社会や地域を変えていく下地になるのではないかと。災害時の避難などの際、お隣さんに一声かけることも立派なボランティア。できることから始めればいい」(近藤弘樹さん)。

「社会貢献は難しいと思っているかもしれないが、困っている人のために何かしてあげたい、こんなことをすれば喜んでもらえるのではないかとという優しい心が根底にあることが大事。いざというときに頼りになるのは地域の人であり、人と人のつながり」(村松真貴子さん)。

フォーラムの最後には、参加者全員による『NHK「明日へ」東日本大震災復興支援ソング 花は咲く』の合唱があった。また、主催者を代表して、AJOSC・松尾守人理事による「自然豊かな青森の地で、自然災害に備えながら、自然を活かすことを通じて地域の力をさらに高めてほしい」というあいさつで、今回のフォーラムは締めくくられた。なお、当日の参加者からは、「社会貢献について改めて考えるきっかけになった」、「日常生活でできることを実践していきたい」、「青森で暮らし、生活できることが幸せなことだと実感した」といった感想が寄せられた。

防犯活動や青少年育成を基本に、自然を活かす活動にも努力したい

青森県遊技業協同組合 理事長
大西康弘さん

地域社会に少しでもお役に立ちたい一心で社会貢献活動に地道に取り組んでいますが、その規模や思いのわりには、地域の方々にどれだけご理解をいただいているのか把握しにくいという歯がゆさを感じていました。その点で、このようなフォーラムを開催していただき、青森県遊技業協同組合の活動事例をみなさんに発信するチャンスをいただきましたことは、よい機会を与えていただいたと感謝しております。

当組合は5支部で構成され、各地域で身近な社会貢献活動ができるよう、お互いの顔が見える社会貢献を意識していますが、なかでも防犯活動や青少年育成を基本に、安全・安心に暮らせる街づくりに継続的に取り組んでいます。社会貢献活動では、個人や企業、各種団体が、それぞれに合った役割をすることが大切だと思います。今後もそうした活動に重点を置きながら、震災復興支援、災害に備える活動、自然豊かな青森県において自然と生きる・自然を活かす活動、まさに今回のフォーラムで学んだ分野でも努力をしていきたいと考えています。